

週刊 学びのコミュニティ

第 61 号

平成 22 年 10 月 6 日発行

海外出張報告 第1弾!

大橋眞教授、斎藤隆仁准教授、光永雅子特任助教が 8 月 14 日～8 月 25 日の間、パプアニューギニアへ出張いたしました。この出張の意義や取組内容について報告いたします。

パプアニューギニアは、800の言語があると
言われている。世界で使われている言語は、
約5000とすると、約6分の1がパプアニュー
ギニアにあるということになる。まさに、言語の
博物館だ。現在はグローバル化の時代と言われる
が、世界のグローバル化は歴史上に記録が残る様
になって以来一貫して進行してきた。とりわけ、
帝国主義の時代からその傾向は著しく、ヨーロッ

パの一部の
言語が植民
地の多くの
言語を駆逐
していった。



それとともに民族固有の文化も失われていった。
そこには、様々な仕掛けがあったに違いない。し
かし、パプアニューギニアはそのような時代にも
耐え抜いた民族文化が今も残っている。パプアニ
ューギニアの人達は、強い意志を持ちながら無言
でグローバル化の意味を世界に訴えかけようと
しているのではないだろうか？（大橋眞）

パプアニューギニアを 通してみた日本

考えてみると、開発途上国を訪れるのは初めて
のことです。なかでもパプアニューギニア(PNG)

は「秘境」、「未開」、「裸族」といったイメージが
強いのに加え、ガイドブックや Web 上で紹介され
る人々は独特の原始的な姿をしているため、ど
んな出会いがあるかを楽しみにして訪れました。
今回の訪問では、町中のホテルではなく、村の家
に宿泊できたため、様々な折に村人と話をする機
会に恵まれました。彼らとのコミュニケーション
のきっかけは、なぜ私たちがここに来て、何をし
ようとしているのかということです。学びのコミ
ュニティーという徳島大学の教育プログラムにつ
いて説明が一通り済むと、話は PNG の教育制度、
彼らの政治体制・経済状況、日本の経済発展への
あこがれといった話になっていきます。多くの話
題において、彼らなりにおかれている状況とその
理由をグローバルな視点でとらえていると感じる
ことができました。村にあった1台のテレビは故
障しているようで、ラジオと新聞があるだけです。
書籍・雑誌はほとんど見かけませんでした。まし
てや海外に直接出向くこともほとんどないよう
です。今の日
本では情報
があふれて
いますが、
ここではそ
れほど情報が
多くなくても、
コミュニティ
の中で密な
会話が成り
立っている
ようです。そ
の中で吟味
して自分た
ちの知識と
しているの
かもし



れません。そんな中、彼らは日本といえば JICA (国際協力機構) による支援を真っ先に思い出すようです。確かに日本は毎年 1 千億円以上の予算を計上していて、PNG へも年間 8 億円 (2008 年度) の援助があります。そうした援助をどのように活用して、どのような将来像を描いているのかについて、村人からの明確なビジョンはほとんどありませんでした。海外支援で社会基盤を整備し、現在進行中の LNG (天然ガス) プロジェクトによる外貨獲得によって、少しでも豊かになりたいという思いだけが先走りしているように感じられました。翻って、日本について考えてみると、20 年以上続く不況を早く脱出したいという思いはあっても、その先のビジョンを多くの日本人が共有はしていないように思います。まさに PNG という鏡を通して日本を見つめなおす良い機会となりました。大学においては学びを通して、世界の将来像をそれぞれが考え、意見交換をする場が大切でしょう。徳島大学での取り組み「学びのコミュニティー」は、大学の授業あるいは課外活動においてこうした場を提供するものです。今後、開発途上国を扱う課題が出てきた際には、自分とは関係のない話題とは思わずに、途上国を通して日本の過去から未来そして目指すべき世界観を学生・社会人・教員が一体となって共に考えていきませんか。

(斎藤隆仁)

パアニューギニアは、南太平洋にあるニューギニア島の東半分と周辺の島々からなります。日本からは成田ー首都のポートモレスビーまでの直通便があり、約 6 時間半のフライト。時差も 1 時間です。赤道直下という日本とは異なった気候ながら、今回訪れたゴロカはハイランドで大変過ごしやすく、むしろ帰国してからの日本の酷暑にすっかりまいてしまったほどでした。現地では初日を除き、全て村で生活をさせていただきました。木と葉からできた伝統的な家に、かまどを中心とした生活。水はもちろん湧き水をく



み、洗たくや洗髪などはすべて川で行います。畑仕事とコーヒー豆の栽培を中心とした暮らし

の、貧しいながらも食べていくことには無理のない村でした。パプアニューギニアでは大学への進学率は 1% 程度といわれています。日本の小学校、中学校にあたる学校へも全ての子供が通っているわけではなく、一学年の年齢もさまざまです。

『教育』という観点から私がこの国で知りたかったことは、日本はこれまで援助という形でお金や人を送ってきたけれども、私たちは彼等から何を学んだらうか? ということでした。我々が大学教育と生涯教育の融合を考える時、世界中のさまざまな暮らしや立場の人々から学ぶことが可能であるはず。毎日、そしておそらく長い間変わることはない暮らしを守り続ける人々。そして子供は働き手の一人として労働の中から思想や知恵を身につけていく・・・そこに教育機関が果たす役割とは? そもそも、教育機関で得られる学びとは? 私たちが当たり前と思っていることを改めてを問い直すきっかけがパプアニューギニアの暮らしの中にあつたように思います。(光永雅子)



編集後記

10 月 1 日から後期授業が始まり、キャンパスも生き生きとした表情に。つい先頃までの暑さからは想像もできないほど、涼やかな風が吹くようになりました。どこからともなく金木犀の花の香りがします。甘くゆったりとした香りは、秋ならではの。心も体も落ち着いてゆっくりと読書をしてみたいくなります。学生支援室には約 3000 冊の本をそろえています。どうぞお気軽にお尋ねください。(光永)